No.

バングラデシュ・スリランカ
日本語教育分野巡回指導調査
報告書

平成 16 年 11 月

（2004 年）

独立行政法人国際協力機構
青 年 海 外 協 力 隊 事 務 局

青
JR
04-07

序　　文

スリランカへの隊員派遣は1981年に始まり、2004年7月30日現在までに585名の隊員を派遣している。日本語教師隊員派遣に関しては、1985年に始まり、現在3名の日本語教師隊員が活動している。首都コロンボにあるスリランカ日本語教育協会、山間部のラトナプラにあるサバラガムワ大学には、それぞれ1985年と1993年に隊員派遣を開始し、両機関ともコースは全体的に充実度を増し、調整・見直しの段階に入っている。また、中規模都市ゴールにあるゴール技術訓練短期大学には、1998年に隊員派遣を開始したが、雇用機会の少ない同国において日本語を一技術として就職に結びつけるのは更に困難であり、現在派遣中の隊員をもって派遣を終了する予定であるため、派遣終了に係る協力方針を策定する必要がある。

バングラデシュへの隊員派遣は1973年に始まり、2004年7月30日現在までに830名の隊員を派遣している。日本語教師隊員派遣は、2003年4月に一般短期隊員を大蔵省経済関係局に派遣し、同国における日本語教育の現状調査を行い、2004年7月、ダッカ大学に一般隊員を派遣した。同配属先には、1974年より国際交流基金専門家が派遣されていたが、大学内の不安定な状況や国際交流基金の協力方針の転換などを理由に1998年に派遣終了した。その後、同大学が日本人日本語教師の重要性を認識し、JOCV派遣要請に至ったという経緯があるため、配属先・隊員本人・JICA事務所および協力隊事務局など関係者間において、20数年にわたった同配属先への国際交流基金の協力内容・協力結果をふまえた今後のJOCV日本語教師の具体的な活動方針を共有する必要がある。

このような現状を踏まえ、平成16年9月12日から9月25日までの間、当事務局は日本語教育分野巡回指導調査を実施した。目的は、派遣中隊員の活動現場を視察し、配属先および関係機関に意見聴取を実施することにより、今後の派遣計画および隊員活動支援方針について検討することである。

本報告書は、同調査団による調査結果をとりまとめたものであり、今後のスリランカ、バングラデシュにおける日本語教師隊員派遣の協力指針策定にあたり、広く関係者に活用されることを願うものである。

ここに、今回の調査にご協力いただいた関係者の方々に対し、深く謝意を表するとともに、引き続きいっそうのご支援をお願いする次第である。

平成16年11月

独立行政法人国際協力機構
青年海外協力隊事務局
事務局長　大塚　正明

目　　次

序　文

Ⅰ．　調査について
　１．調査の経緯と目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　２．調査項目・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
　３．調査団の構成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
　４．調査日程および主要面談者・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

Ⅱ．　調査結果　―スリランカ―
　１．スリランカ日本語教育事情・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
　２．各日本語教師隊員配属先の現況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
　　・サバラガムワ大学
　　・ゴール技術訓練短期大学
　　・スリランカ日本語教育協会
　３．在スリランカ大使館・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
　４．他日本語教育関連機関(他国立大学等)・・・・・・・・・・・・・・・・11
　５．他職種隊員派遣機関・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

Ⅲ．　調査結果　―バングラデシュ―
　１．バングラデシュ日本語教育事情・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
　２．日本語教師隊員配属先
　　・ダッカ大学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
　３．在バングラデシュ日本大使館・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
　４．他日本語教育関連機関(大学、民間語学学校等)・・・・・・・・・・・19
　５．他職種隊員派遣機関・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22

Ⅳ．　団長総括
　１．スリランカ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
　２．バングラデシュ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
　３．全体総括(今後の課題)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24

謝辞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26

巻末資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
１．「スリランカ日本語教育分野巡回指導調査団」対処方針
２．「バングラデシュ日本語教育分野巡回指導調査団」対処方針
３．隊員配属先日本語コースの現況
４．写真

Ⅰ． 調査について

１． 調査の経緯と目的

―スリランカ―

JICA ボランティア派遣開始時期・派遣数　（2004 年 7 月 30 日現在）

		派遣開始	派遣実績	派遣中
JOCV	全職種	1981 年 4 月	一般隊員：557 名 一般短期：15 名 シニア隊員：8 名 シニア短期：5 名	一般隊員：37 名 一般短期：0 名 シニア隊員：2 名 シニア短期：0 名
	日本語教育	1985 年 8 月	一般隊員：39 名 一般短期：2 名 シニア短期：1 名	一般隊員：3 名 一般短期：0 名 シニア短期：0 名

スリランカへの日本語教師隊員派遣は 1985 年に始まり 19 年目を迎えている。現在までに 42 名（一般隊員：39 名、一般短期：2 名、シニア短期：1 名）が派遣された。現在、3 名の日本語教師隊員が、それぞれ、①商業首都コロンボのスリランカ日本語教育協会（1985 年派遣開始）、②山間部ラトナプラのサバラガムワ大学（1993 年派遣開始）、③中規模都市ゴールのゴール技術訓練短期大学（1998 年派遣開始）に派遣されている。

① スリランカ日本語教育協会ついては、スリランカの日本語教育分野における存在意義も高いことから、今後も継続的に隊員派遣が予定されているので、経緯・現状を確認し、今後を展望する。
② サバラガムワ大学についても、派遣開始から今日までを総括し、今後の課題を確認する。

ゴール技術訓練短期大学については、現在派遣中の隊員をもって派遣終了予定であるが、配属先での現状を確認する。

他の日本語教育機関の視察も行い、スリランカにおける日本語教育全体の現状および問題点を把握する。

本調査では、上記を踏まえて、隊員に対する助言を行うとともに、今後の日本語教師派遣に関し、関係機関および事務所と協議することを目的とし行われた。

―バングラデシュ―

JICA ボランティア派遣開始時期・派遣数　（2004 年 7 月 30 日現在）

		派遣開始	派遣実績	派遣中
JOCV	全職種	1973 年 8 月	一般隊員：773 名 一般短期：30 名 シニア隊員：18 名 シニア短期：9 名	一般隊員：46 名 一般短期：0 名 シニア隊員：2 名 シニア短期：0 名
	日本語教育	2003 年 4 月	一般隊員：1 名 一般短期：1 名	一般隊員：1 名 一般短期：0 名

バングラデシュへの日本語教師隊員派遣は、2003 年 4 月の一般短期隊員派遣で始まる。同隊員は、大蔵省経済関係局を配属先とし、バ国における日本語教育の現状調査を行った。同 2004 年 7 月、一般隊員（16 年度１次隊）が派遣され、９月にダッカ大学に配属となった。

同配属先には、1974 年以来約 25 年間にわたり国際交流基金の専門家派遣が行われ、1998 年に派遣を終了した。その協力内容・協力結果を確認し、配属先・隊員・JICA 事務所および協力隊事務局など関係者間において、今後の JOCV 日本語教師の具体的な活動方針を共有する必要がある。

本調査は、上記を踏まえて、バングラデシュにおける日本語教育の現状および問題点を総括的に把握し、具体的な活動を開始しつつある隊員と意見の交換をし、今後の日本語教師派遣について事務所と協議することを目的として行われた。

２．調査項目

―２カ国共通―

１．各国における日本語教育の目的と今後の計画および将来性を調査する。
２．各国で求められる日本語教育のタイプを調査する。
３．国別事業実施計画の中での日本語教育の位置づけを確認する。
４．派遣中日本語教師隊員の活動現場を視察し、今後の派遣方針について検討を行う。

―スリランカ―

１．ゴール技術訓練短期大学への隊員派遣終了に係る協議
２．サバラガムワ大学、スリランカ日本語教育協会の今後の見通し

―バングラデシュ―

１．国際交流基金専門家派遣終了および青年海外協力隊隊員派遣に至った詳細な経緯
２．隊員配属先における今後の協力の見通し

３．調査団の構成

総括／日本語教育　：　佐久間勝彦
（聖心女子大学文学部教授／青年海外協力隊事務局技術顧問）

協力企画　　：　工藤智穂
（青年海外協力隊事務局　国内協力員）

４．調査日程および主要面談者

日程：平成 16 年 9 月 12 日から 25 日まで 14 日間

	日付	時間	内容	場所
1	9 月 12 日	11:00 15:30 21:45 23:59	成田発(TG647) バンコク着 バンコク発（TG307） コロンボ着	移動
2	9 月 13 日	10:00 10:10 11:20 14:00 16:00 17:10 19:00	在ス日本大使館 ・大西英之一等書記官と面談 ・松尾秀明一等書記官および森山秀三三等書記官と面談 JICA スリランカ事務所 ・杉原所長、坂田次長と面談 NYSC マハラガマ文化スポーツセンター ・Kamaladasa 言語コース学科長および Janaki 氏（現地人日本語教師）と面談 14-3 若林隊員（バレーボール）の活動視察 本橋国際交流金専門家と面談	コロンボ マハラガマ コロンボ
3	9 月 14 日	10:00 14:00 19:00	JICA 事務所にて D.Ratnataka 氏（ケラニア大学現地人日本語教師）と面談 コロンボ出発 ベリフルオヤ到着 15-3 高嶋隊員と面談	コロンボ ベリフルオヤ
4	9 月 15 日	9：45 11:00 12:20 15:30	サバラガムワ大学 ・M.Ariyaratne 言語学科長と面談 ・I.K.Perera 学長表敬訪問 サバラガムワ出発 キャシーリッチ記念食品加工研究所 ・14-3 河野隊員（料理）の配属先見学	ベリフルオヤ エンビリピティヤ

		19:40	ゴール着　14-3 岡村隊員と面談	ゴール
5	9月16日	9：00 10:00 11:00 12:30 17:00 19:30	ゴール職業訓練短期大学 ・校長および副校長と面談 ・岡村隊員の授業見学 ・Padma 氏（CP）の授業見学 コロンボへ向け出発 スリランカ日本語教育協会 ・14-3 小林隊員の授業見学 ・現地人教師の授業見学 小林隊員および現地人教師と面談	ゴール コロンボ
6	9月17日	9:30 12:00 14:00 15:00 16:00 23:00	スリ・ジャヤワルダナプラ大学 ・C.Wijebandara 学長および J.Seneviratne 氏（日本語コース担当教師）と面談 セント・ジョセフ女子校 ・Ashika Rupasinghe 氏の授業（A レベルコース）見学 Ashika Rupasinghe 氏と面談 Dr.Pucnchibanda と面談 （スリランカ一般事情説明） JICA 事務所報告 ホテル発空港へ	 コロンボ
7	9月18日	1:40 6:05 10:30 11:55 13:20 13:30	コロンボ発（TG308） バンコク着 バンコク発（TG321） ダッカ着 ホテル着 日程等打ち合わせ	移動 ダッカ
8	9月19日	10:00 12:10 15:00 16:30 20:00	在バングラデシュ日本大使館 ・堀口松城大使表敬訪問 ・新田康二一等書記官、進藤康治二等書記官、ラハマン多美恵氏と面談 JICA 事務所 ・新井所長、河崎次長、江崎調整員と面談 Japan Study Center ・M.Ataur Rahman センター長と面談 IML（ダッカ大学現代言語研究所） ・Rahela Banu 学部長表敬訪問 ・Rezaul Karim 学科長と面談 滋賀隊員と面談	ダッカ

9	9月20日	12:00 14:00	PTI（初等教員訓練機関） URC（郡リソースセンター） ・現地の小学校授業見学 隊員と懇談	マイメイシン県
10	9月21日	10:30 16:00	PTI（初等教員訓練機関） ・授業見学 サッカー連盟 ・16-1三田隊員活動見学	カジプール県 ダッカ
11	9月22日	10:30 15:00 16:00	Jahangir nagar University ・Shamsun Nahar言語センター長と面談 Royal Global Network Nobel Institute (民間語学学校) ・Sahadat Sarwar学校長と面談 JUAAB事務所 ・Mozammel Hoq協会長、Kabir Ahemed氏、Mohibur Rahman氏、Shafiqur Rahman氏と面談	ダッカ
12	9月23日	16:00	大使館にて報告会	ダッカ
13	9月24日	13:10 16:30 23:10	ダッカ発（TG322） バンコク着 バンコク発（TG642）	移動
14	9月25日	7:30	成田着	東京

Ⅱ． 調査結果　―スリランカ―

１． スリランカ日本語教育事情

日本語教師隊員派遣開始後 20 年になろうとする日本語教育協会（旧大使館講座）が、今日もなお、学習者、クラス、スタッフの数などにおいてスリランカで最大規模の日本語教育機関であること、そして、国際交流基金の専門家派遣の長いケラニア大学の日本語講座が着実に成長してきていることを確認した。派遣開始以来 JOCV が日本語教育の基礎を築いてきたサバラガムワ大学は、ケラニア大学などと比べ歴史は浅いが、大学側の姿勢などがしっかりしており、今後の展開が大いに期待される。日本語教育協会への協力同様、特に JOCV の活動の質が問われる。

２． 各日本語教師隊員配属先の現況

サバラガムワ大学　　1993 年隊員派遣開始

派遣中隊員　：　高嶋友子（15 年度 3 次隊）

(1) 概況

この大学は、隊員派遣開始当時（1993 年）、3 年制の大学ではなく 2 年制の短期大学で、日本語の授業は商学部観光学科の学生を対象に行われていた。その後、大学に昇格する際に社会科学言語学部言語学科を設け、日本語を主専攻、副専攻、選択科目として開講した。現在、スリランカにおいて学部レベルで日本語が専攻できる大学は、当サバラガムワ大学とケラニア大学（国際交流基金専門家派遣中）のみである。

(2) 配属先との協議について

まず、隊員を交え言語学科長アリヤラトネ氏と意見交換を行った。学科長からは、JOCV について以下のような意見が述べられた。

① 今後スリランカ人ベースで日本語コースを運営していくためにも、隊員を有効に活用していきたい。

② コースの課題としてカリキュラム・シラバス改善等があり、隊員と協力して進めていきたい。

それに対し、調査団からは、②のカリキュラム・シラバス改善については、抜本的見直しは一般隊員が通常の活動をしつつ行うのには多少無理があることを説明し、あくまでも一つの可能性として、一般隊員に重ねてシニア隊員を要請するなどしてプロジェクトのような形で取り組む方法を示唆し、さらにその発展としてオリジナル教科書の編集といった課題のあることも付け加えた。また、調整員からは、バックアッププログラムも使えるかもしれないことを指摘した。

その後、学長室で意見交換を行ったが、学長は、開口一番、一般の隊員とは別に、短期間でもよいからプログラムなどを抜本的に見直す専門家的な人を派遣してもらえたらよいと思うと述べられ、本質を見抜いた鋭い発言に驚かされるとともに、今後のサバラガムワ大学の日本語講座の発展が期待できた。日本側の協力の方法を模索する必要があるだろう。（写真①）

(3) 日本語コースについて

日本語能力試験 2 級合格を目標とした主専攻コースに加え、初心者を対象とした副専攻コースを開設。現地人教師 3 名と隊員 1 名の計 4 名で運営している。この副専攻コースの存在が、ケラニア大学と大きく異なる特色でもある。

(4) 派遣中の隊員高嶋友子（15 年度 3 次隊）との面談について

水不足とストのため活動が事実上中断されており、高嶋隊員の授業見学はできなかったが、15 年度 3 次隊の隊員であるので活動もこれからという時期で、まだ問題らしい問題にぶつかっていないように思われた。

日本語教師としての経験がないことから、当大学のどちらかと言えば本格的な日本語教育に臨むことに不安を感じているように見受けられたが、社会経験も十分ある隊員なので、少々の問題は乗り越えていってほしい。

(5) 団長所感

サバラガムワ大学の日本語コースは、JOCV 派遣開始以来、有能な隊員が全力で作り上げてきたものだが、単にケラニア大学を模倣したり、それに追いつく努力を重ねたりするだけでは、存在意義が薄くなるはずである。ケラニア大学とは違った特色を模索しつつ、今こそ質的な向上を課題とすべき重要な時期にきているという認識を新たにした。それは、学長自身が見抜いているとおりである。JOCV としては海外での日本語教師経験のある隊員を投入してでも、今までの活動を総括し、今後を展望し、オリジナル教科書編集の構想・企画を開始するなど質的に高い協力課題を設けないと、惰性的な派遣となるおそれがあるように思われる。後述するが、今後協力の質を高める方策として海外での活動経験のある日本語教師隊員派遣の強化などの努力が不可欠だろう。

ゴール技術訓練短期大学　　1998 年隊員派遣開始

派遣中隊員　：　岡村佳代子（14 年度 3 次隊）

(1) 概況

職業訓練を目的とする全国 37 校の短大のうち中規模都ゴールにある当短期大学で小規模な日本語教育が行われている。現在 4 代目となる隊員が派遣されているが、雇用機会の少ない当国において日本語を一技術として就職に結びつけることは困難であるうえ、配属先機関も十分具体的な計画が持ち得ないことから現在派遣中の隊員をもって派遣を終了する予定である。

(2) 配属先との協議について

配属先は、JOCV の派遣終了で日本人教師がいなくなることから、学生数の減少を懸念してはいるものの、協議では、日本語教師の派遣継続の必要性よりもコンピューター関連技術の JOCV の必要性や設備面での不備について訴えていた。調査団側から、日本語コースを発展させるための明確な方針のないところに JOCV 派遣を継続するのは難しい旨を伝え、一方、一度 JOCV 派遣を終了してしまった機関であっても、その後機関の自助努力が確認されて再派遣となるケースもあることを示唆した。協議の結果、コンピューター技術の JOCV が派遣再開となる可能性があることから、日本語教師派遣終了後も配属先と連絡を保ち、日本語コースの今後を見守っていく必要が確認された。

(3) 日本語コースについて

職業訓練校において、大学入学資格（A レベル）合格および日本語能力試験 3 級を目標とした主専攻コース（1 年）を開設。現地人教師 1 名と JOCV 隊員 1 名で運営している。

カウンターパートの授業は、いくらか強引なところもあるが力強く、学生たちの信頼を得るものだと思われた。ただ、日本語運用能力はかなり低いレベルにあり、即席に作る例文が日本語として正しくなかったり、発音が不適切だったりするので、日本語のネイティブスピーカーの協力が得られなくなった場合、学習者が損失を被ることは明らかである。最大の問題は、外国語としての自分自身の日本語を客観的に捉えることができてないことであり、校長、副校長はじめ数名のスタッフと調査団との全体協議で「文法はまったく問題ない」と公言するほどである。これについては、岡村隊員が指摘するように、今後この機関の中核として期待されるに人材として不安を禁じえない。

(4) 派遣中隊員岡村（14 年度 3 次隊）との面談について

同隊員で当配属先への派遣は終了予定であることから、隊員自身、任期終了までの活動の方向性を決めかねているようであった。面談は、協力活動の意味・姿勢などについて考える時間とし、“ボランティア”、“マンパワー”について考え、JOCV としての、とくに協力における“無償性”に着目するよう助言した。翌日見学した隊員の授業はかなり高い水準にあり、このような授業が週に何時間か保障され、継続されていけば、学習者の日本語は確実に伸びるはずである。

(5) 団長所感

同機関への日本語教師隊員の派遣は打ち切りとなる予定である。南部でも日本語学習希望者のニーズに応えられる場所を確保することの意義は大きいと思われるが、諸条件を考慮するとき優先順が低くなることはやむを得ない。残念である。

予定通り、一旦派遣を打ち切り、様子を見るべきだろう。校長はじめ管理職の先生方に、万一派遣継続が困難な場合の対処方針等を伺ったのは、自助努力について考え始める契機としていただきたかったからである。（写真②、③）

スリランカ日本語教育協会　　1985 年隊員派遣開始

派遣中隊員　：　小林円（14 年度 3 次隊）

(1) 概況

スリランカ日本語教育協会はかつての日本大使館による日本語講座を前身とする。2002 年末までの試験的移管期間を経て、現在は、JASTECA（AOTS スリランカ同窓会）が経営母体である。

約 10 代（複数の隊員同時派遣の時期あり）にわたって十数名の隊員が派遣されており、中学校卒業程度の 16 歳から 50 代まで幅広い学習者を対象に夜間や週末コースも開講しており、当国における日本語教育の中核的存在となっている。広く一般に門戸を開いた社会人対象講座としての同国における存在意義はきわめて高い。

(2) 配属先との協議について

今回は、配属先との協議はとくに行わなかった。

(3) 日本語コースについて

入門から上級まで 8 コースを開設している。現地人の教師 8 名、日本人の教師 1 名、JOCV 隊員 1 名で運営している。この規模は、スリランカ全体で最大のものである。

(4) 派遣中隊員小林円（14 年度 3 次隊）について

小林隊員との個別面談は行わなかったが､隊員と現地人教師 2 名の 3 つの授業を見学し、その後、隊員のほか協会での同僚 3 名と夕食を共にし、十分な意見交換の時間を持った。

小林隊員については、授業もそうだが、人間的な成熟度を十分に感じさせる隊員で、まったく心配のないことが確認された。配属先機関の同僚たちからの信頼も篤く、敬愛されているという印象さえ受けた。

現地人教師の授業では、始まったばかりのクラスで学生が 32 名いるにもかかわらず、すべての学生の名前を覚えて指名している誠実さや、効率よく学生に発表をさせている授業進行の上手さが印象に残った。

(5) 団長所感

JICAの日本語教師隊員をいつまで派遣し続けるかという問題との関連で、それ以上に大切なこととして、協会の発展の経緯を総括し、新たな課題を設定することの必要を感じた。具体的には、日本語教育活動面での実績、スタッフの質、数においてスリランカの指導的機関でありつづけた協会の役割に着目すれば、“借り物”の教科書に別れを告げて、オリジナル教科書編集、出版へ向けて一歩を踏み出すべきだと思う。旧大使館付属講座としての性格、多くのJOCVや国際交流基金の専門家などが協力してきた経緯などを考えると、日本の政府関係機関が深く関与してきた日本語講座として、このまま“借り物”の教科書で教育活動を続けることは問題であるとさえいえる。たとえば、2 代か 3 代の教科書作成が可能な隊員派遣などを想定し、協会オリジナル教科書の編集プロジェクトを企画するのも一案かもしれない。ただし、そうした隊員になりうるのは、協会での活動経験を持つ特別に優れた人材に限られる。やはり、JICAとして、協力の質を高める努力が求められる。(写真④)

【補足】　　― 配属先の呼称について ―

同機関が、スリランカの日本語教育界において、安定した日本語教育機関として発展を遂げてきたことを再確認したが、機関の呼称が少し気になった。同機関は笹川平和財団が造った建物で日本語コースを提供してきた経緯から、「ササカワ」が通称となり、スリランカで広く親しまれている。

スリランカでの関係者の間では問題にならないことだが、今日財政面などにおいて笹川平和財団とは関係を持たないスリランカ日本語協会を表す略称（通称）の“ ササカワ ”が、隊員の報告書などに「ササカワで学習した…」「ササカワのプログラム」などという形で頻出することに触れ、日本でそれを読む人々への配慮の必要を指摘した。

３．在スリランカ大使館

(1) JOCV 日本語教師隊員派遣について

スリランカ国全体の日本語の今後について、大西一等書記官と意見交換を行った。大西一等書記官はジャマイカ、バングラデシュ、ネパールなどでの経験がおありで、国際交流基金や JICA の協力の方法や質の問題に強い関心があり、JOCV の協力にあたっては、総点検をしたうえで、しっかり臨む必要のあることを説かれた。

以下、JOCV 日本語教師隊員派遣について大西書記官からご指摘を受けた点である。

① 高等教育機関での正規の日本語コースへ派遣される JOCV には大変な責任があり、a.教養、b.知識、c.社会性を持った人材の派遣が望まれる。また、そのような問題意識を隊員に持たせることは JOCV 派遣を行っている JICA の重要な役目である。

② ラジャラタ大学は、観光コースの選択科目として日本語教育が行われているが、これまで隊員派遣は検討されてこなかった。今後和平の交渉が進むにつれ、日本語教師隊員の派遣要請のあがる可能性があるが、スリランカの観光日本語支援をすることになった場合、単にガイドとして使用する日本語の教授にとどまるものではなく、社会人としてのマナーと体系的な日本語をあわせて教えるべきだろう。

以上から、調査団側は、今後スリランカ全体の日本語教育を発展させるためには、スリランカ側が教師間のネットワークを強めて要となる組織を作り自立していく努力をする必要のあること、また日本側はその支援のために教授経験のみでなく、行政能力のある人材を派遣するというような努力を All Japan として模索しなければいけない時機であることを確認した。

(2) スリランカ全体の日本語教育について

引き続き、松尾秀明一等書記官、森山秀三三等書記官にお話を伺った。以下 4 点、スリランカ全体の日本語教育について説明を受けた。

① 日本語教育を実施する機関は増加しているが、スリランカ全体の日本語教育の問題は、現地人教師のレベルが、「日本語を専門として教えられるレベル」に達していないことである。

② 北東部にあるジャフナ大学からは、大使が訪問した際、日本語教師の派遣を求められた。北東部は現在、隊員の派遣は行われていないが、今後和平が急速に進む可能性があり、その場合、隊員派遣の要請も考えられる。
③ コロンボ大学の大学院修士課程では、日本の政治・経済などが教えられているが、シルバーボランティアズがそれに対応できる十分な資質を持ち合わせた人材を派遣している。
④ 中等教育機関についても、教師の日本語教授レベルの向上が主な課題と考えられるが、スリランカの省庁レベルで日本語教師養成に取り組む可能性はなく、やはり日本語教育の人材育成に関しても、国際交流金専門家を中心とした人材育成の場を作ることが第一歩である。

(3) 団長所感

以上が、大使館で伺った内容であるが、JOCV としても国際交流基金派遣の専門家と関係する問題では、少なからず苦慮してきているので、今後具体的な調整が不可欠であると認識している。国際交流金専門家派遣について、派遣の目的は「スリランカ全体の日本語教育への貢献」であるが、名目上ひとつの大学への派遣として継続されている現状では、専門家個人の姿勢や意欲等に左右されることになり、「全体への貢献」を十分期待することが難しい場合もある。しかしスリランカの教育省などに日本語教育を担当している部署が存在しない現段階では、たとえ派遣専門家のタイプがアドバイザー型になったとしても、配属先の変更は考えられないのではないだろうか。

そこで、現在できる対処として、今後ケラニア大学へ派遣される専門家に、国際交流基金派遣の専門家は「スリランカ全体の日本語教育への貢献」が求められていることを明確に伝える必要があるだろう。そのためには、基金が専門家を派遣するときに、正式なレターとして、job description を作成し、それを派遣先機関にも送付するとよいだろう。

４． 他日本語教育関連機関（他国立大学等）

(1) ケラニア大学・常勤講師ラトナヤカ氏との面談

ケラニア大学で現地人教師ラトナヤカ氏の授業を見学する予定であったが、国立大学全体の事務スタッフのストライキのため学内に入るのが危険とのことで、JICA 事務所においでいただき、会議室にて面談した。

ラトナヤカ氏は中学生時代に日本語学習を始めたという大変熱心な方で、学習者として、また日本語教師として、さまざまな現地人日本語教師および日本人日本語教師（その中には多くの基金専門家や日本語教師隊員を含む）と接してこられた。主にその経験からもスリランカ全体の日本語教育を捉え、多くの問題点を把握していらっしゃるように思われた。近い将来スリランカの日本語教育をよりよくするための“キーパーソン”的な存在となっていくのではないかという印象を得た。

① ラトナヤカ氏について

a.日本語学習歴

中学生のとき現スリランカ日本語教育協会で日本語を学び始め、高校でも学習を継続し、ケラニア大学に入学。（大学では、日本語のほかに中国語とシンハラ語を履修。）

b.日本語教授歴

大学卒業後、現スリランカ日本語教育協会で隊員から日本語教授法の指導を受け、日本語を教え始める。2003 年 4 月にケラニア大学日本語学科の常勤講師となり、日本語を教えている。常勤講師になる前は、2 年間、非常勤講師として教えていた。

c.現在

ケラニア大学とスリランカ日本語教育協会で日本語を教えている。（スリランカでは掛け持ちで日本語教師をすることが多い。）同時に、ケラニア大学の修士課程で言語学を学んでいる。

② ケラニア大学・日本語コースについて

a.教師

・常 勤 講 師　：　1 名（ポストは 2 つあるが、現在ラトナヤカ先生のみ。）

・非常勤講師　：　3 名（うち 2 名は full time で教えているが、身分的には非常勤講師。）

・そ　の　他　：　日本人教師は国際交流金専門家とシルバーボランティアズがそれぞれ 1 名。

b.常勤講師採用になるためには、以下の条件を満たす必要がある。

・アシスタントとして 2 年の教授経験

・修士号を持っていること

・学士号の成績優秀者（主席か次席レベル）

ラトナヤカ氏からは、長年にわたりスリランカにおける日本語教育に関わってきた経験を踏まえ、ⅰ.望む隊員像、ⅱ.望む国際交流金専門家像、ⅲ.スリランカ日本語教育の課題について、いろいろ提言をいただいた。

ⅰ.望む隊員像

第一に、「広い心を持った人、物事を広く捉えられる人」という回答を得た。「日本語教育」という非常に狭い人間関係の中で、経験豊富な年長者の現地人教師を敬い、しかし、そのような先生方に対しても日本語教授法を学んだ日本人日本語教師として適切なアドバイスのできる何かを持っている人材が望ましい。

ⅱ.望む国際交流金専門家像

新しいアドバイザー型の専門家でも、ひとつの決まった機関付けの専門家でも、どちらでもよいが、「本当にスリランカで日本語を教えたい」という気持ちを持った人が必要。

ⅲ.スリランカ日本語教育の課題

今後のスリランカの日本語教育の発展のためには**中等教育機関での日本語教育の改善**が最優先課題である。

・中等教育機関で教える教員の問題

中等教育機関では日本語教師を常勤講師として雇うことはないので、日本語関連の優秀な人材は中等教育機関で教えようとはしない。そのような理由から、日本語能力が初級レベルに留まるような人材が、非常勤講師として中等教育機関で日本語を教えるケースが非常に多い。また、コロンボの主要な A レベル校で日本語が教えられているが、機関ごとの日本語レベルの格差が激しいのも、必ずしもある一定程度の教授レベルを持った教員が教えているとは限らないという現状からきているものと考えられる。

・中等教育機関における日本語シラバスの見直し

現在、中等教育機関の日本語シラバスは A レベル試験にあわせた“受験日本語”であり、学習者にとっては暗記中心の内容である。教師にとっては上記の現状から、教師自身が理解できない難しい内容となっている。また、「点数の取りやすい簡単な科目」として日本語を選択する学生が多いなか、やはり、日本語学習から外国語を学ぶことの楽しさを味わってほしいという教える側の願いもある。

③ 団長所感

ラトナヤカ氏の提言は、どれも貴重だが、とくにⅲ.についての、上記 2 点の課題は、深く鋭い現状分析を前提に、スリランカの日本語教育の今後を左右する重要な事柄を含んでいると判断される。しかしながら、いずれも、日本語教育関係者の専門性の高低、経験の長短、ネイティブ・ノンネイティブの違いを問わず、個人で行えるものではなく、今後の取り組みが容易ではない。以前、JOCV の日本語教師隊員はスリランカの中等学校で日本語教育活動を展開していたが、上記の問題ゆえに撤退したと言ってもよいだろう。

スリランカ教育省に日本語教育を担当している部署もないため、相当な時間をかけて粘り強く取り組む姿勢が不可欠である。とくに一国の公教育の場合、外国が関与してよい余地は少なく、内発的な動きを見守ることが肝要となる。その意味でも、ラトナヤカ氏のような優れた問題意識を持った若手の存在は現状では唯一の足掛かりという印象を受けた。ラトナヤカ氏ご自身、日本が All Japan として長年関わってきたスリランカにおける日本語教育の大きな“成果”とも言えるだろう。とくに今後の支援が重要である。

(2) スリジャヤワルダナプラ大学

過去に JOCV 派遣があったが、大学全体が政治的にラディカルな傾向にあり、ストライキで長期間隊員活動が行えない理由から派遣を終了した。（訪問当日もストで休校中であった。）

現在は、2003 年 11 月から法・経営学部等の学生を対象に 11 クラス開講しており、全体で 800 名弱の学生を現地人教師（非常勤）1 名で教えている。現地人教師は、日本語コースはこれからの時期なので軌道に乗るまで JOCV の協力を得たいと述べた。

<コースについて>

・1 回 2 時間、週 1 回の選択コース

・1 クラスの学生数は 40 名から 120 名

・学習動機は、日本語を習得して観光業に就きたい、日本に留学して経営を学びたい等

(3) NYSC マハラガマ・文化スポーツセンター

過去、長期にわたって JOCV 日本語教師の派遣があったが、人間関係等の問題により派遣を中断した。JOCV 派遣中は 80～100 名いた学習者が 30 名前後に減って活気を失っていた。コースの活性化と日本の文化的背景を持った日本人教師の存在の必要性を感じ、JOCV の再派遣を希望していた。

<コースについて>

・コロンボの中心にある日本語教育機関まで通えない人々のために開設された講座

・1 回 4 時間、週 1 回（週末のみ）の一般向け公開講座

（学習者の人数が増えれば平日にも開講）

・現在、学習者数は初級 1 のクラスに 27 名、中級 1 のクラスに 7 名

（レベルは初級 1・2、中級 1・2 に分けている）

・日本語学習動機は、日本に留学したいというような理由がほとんど

<団長所感>

同機関を訪れ、関係者と面談した結果、マハラガは一日も早く派遣再開をする必要があると判断した。派遣中断は、一時的な JOCV 側の問題であったうえ、配属先は派遣中断後も規模を大幅に縮小してでも何とか日本語クラスを維持しようと努力しているのだから、JOCV には協力の責任があるだろう。ただし、カウンターパートに関しては、隊員などから、ネガティブな条件も報告されているので、今後も様子を見る必要はあるだろうし、派遣を再開する場合には、それらを十分に承知の上で協力活動を考えるようにすべきである。なお、各配属先の問題点や課題を関係者間で把握し、必要事項を派遣前に研修などで隊員に伝えて送り出すことはスリランカに限ったことではなく、一般的に重要なことである。

５．他職種隊員派遣機関

(1) 14 年度 3 次隊・若林隊員（バレーボール）

配属先：NYSC マハラガマ・文化スポーツセンター

任期も残り半年となり、落ち着いた活動を展開しているようであった。訪問当日は、急遽入った練習試合を監督する様子を見学した。

活動開始当初、目の前のプレーヤーの技術の向上に徹するか、それとも後継者育成を念頭に置いた指導をするか、目指すものを何にするか迷ったという。コートでプレーヤーに接すると、勝つことだけがすべてではないと理屈で分かってはいても、彼らの喜ぶことが一番なのではないかという気持ちにもなり、しかし反対に技術レベルを上げるだけでは次に繋がっていかない、彼らは受身のままだ、という気持ちにもなり、これは現在に至っても迷い続けていることである。1 年間半の活動を通し、「バレーボールはルールを守ることから始まる」という信念のもと、規律を守るよう指導してきた。その結果、時間を守るようになり、遅刻するときに連絡を入れるなど、報告・連絡・相談も徹底されるようになった。それが一番大きい成果であるとの自己評価だった。まさに“人づくり”の協力活動だという印象を受けた。

(2) 14 年度 3 次隊・河野隊員（料理）

配属先：キャシー・リッチ記念食品加工研究所

赴任した当初、スリランカと日本の嗜好の違いから、隊員が作ったものを試食さえしてもらえない辛い時期を経験したようだが、まずスリランカの料理を理解し新しいレシピ開発に取り入れたことでやっと受け入れられ、任期が残り半年となった今は精力的な活動を展開しているようであった。

研究所長は、河野隊員の積極的な活動ぶりに接していると、二十数年前のキャシー・リッチその人を思い出すと述懐し、JOCV がシンハラ語でのコミュニケーション能力の高いことに触れ、それがあってこそスリランカの“普通の人々”に受け入れられ、彼らの信頼を得ているのだと思うと述べた。

Ⅲ． 調査結果　―バングラデシュ―

１． バングラデシュ日本語教育事情

国際交流基金日本語教育専門家の派遣が 24 年間に及んだダッカ大学が、バングラデシュにおける日本語教育の中で独占的地位を保っているが、カリキュラムやシラバス、教科書などに、水準以上のものを見出すことは難しい。さまざまな理由があって、基金は派遣を打ち切ったが、JOCV が日本語教師の派遣を開始することとなり、まさにその初代隊員が着任したところである。その協力手法がとくに厳しく問われる出発となること必至である。

２． 日本語教師隊員配属先

ダッカ大学・Institute of Modern Language　　2004 年隊員派遣開始

(1) 概況

同研究所は 1974 年に設立され、世界各国の 13 言語を扱うバングラデシュで最大の外国語研究機関である。日本語コースは同研究所設立以前の 72 年に国際関係・外国語学部に開講され（74 年に同学部の外国語部が独立し現代言語研究所となる）、英語科に次いで生徒数が多く、約 250 名が Junior（初級前半）、Senior（初級後半）、Diploma（中級前半）、Higher Diploma（中級後半）コースに分かれて学習している。そのほか日本語能力試験対策コース、就業者を対象とした短期集中コース（2 ヶ月程度の読み書きを目的としない会話中心講座）も年 2 回行われている。

(2) 配属先との協議について

学科長を交えた協議では、あまり具体的な現状認識、将来展望を伺うことができなかった。ある意味では当然のことではあるが、ノンネイティブ・スピーカーの日本語教師の日本語運用能力の弱さは否めない。

また、同大学内に設置された Japan Study Center に話題が及ぶとき、IML とは関係ないということが強調されて、やや defensive な物言いが目立った。全体的にも建設的な発言等を聞くことはなかった。学科長から、Japan Study Center の所長とは何度か話し合ったが、“ 先輩 ” だから反対できない、というような発言があった。

なお、同席されたラハマン多美恵講師(後述)は、基金の西川格専門家の時代に非常勤講師となられたとのことだが、非常勤講師という不安定な身分ながら、バングラデシュの日本語教育を公平に捉える視点をお持ちで、大使館での信頼も篤く、今後貴重な存在になるのではないかと思われた。

(3) コースについて

日本語能力試験 2 級を最終目標とした 4 年コースを開設。国際関係学部との間で単位制を実施しているものの、実質的には社会人・一般を対象とする社会教育機関である。現地人教師 4 名（内 2 名は日本留学中）と日本人教師 2 名および隊員 1 名の計 7 名（現在は実質 5 名）で運営している。

(4) 志賀龍隊員（16 年度 1 次隊）について

19 日、夕食を共にし、面談する。(当初の予定では同隊員とゆっくり話せるのはこの時間のみになるはずだったが、後述のとおり、ストライキのため休校で、翌日よりバングラデシュ滞在の最終日まで行動を共にすることとなった。) 滋賀隊員は、冷静、公平な見方、旺盛な知的好奇心、そして何よりもその自然体がよい。雇用促進というような課題に重ならない日本語教育の重要性、貴重な意義を十分に認識しており、地味ではあっても質の高い活動が期待できそうである。

特筆すべきは、同隊員が、20、21、22 日と、その後 3 日間、私たち調査団と行動を共にして、さまざまな現場を見ながら意見交換をし、共に考えることができたことである。これは皮肉にもストライキで配属先が機能していないことが幸いした形だが、志賀隊員の行動はすべて自発的なものだった。830 人余になるというバングラデシュ派遣の隊員中、滋賀隊員が日本語教師隊員の第 1 号となることは幸運であるように思われる。

(5) 団長所感

常勤 4 名体制など、さまざまな改善を実現させた大使館、JICA 事務所に敬意を表する。尋常でないご努力に頭が下がる。

それを無にしないために、今後慎重かつ息の長い JOCV の活動を展開する責任のあることを関係者は肝に銘ずるべきだろう。ひとつの目安として、基金が専門家を派遣してきた少なくとも 24 年間ぐらいは、目先の成果を求めすぎることなく、忍耐強く協力をさせてもらう覚悟が必要であるとさえ言える。隊員派遣の歴史の長いバングラデシュに、初めて日本語教師隊員が入ったことの意味を重く受け止めるべきである。また、今後赴任する日本語教師隊員には、ダッカ大学への JOCV 日本語教師派遣に至るまでの経緯、協力方針、日本から派遣される日本語教師の責任などを明確に伝える必要があると思う。

長年にわたり、国際交流基金や基金派遣の専門家の方々、大使館などの尽力が継続され、時には積極的な働きかけがあったと思うが、今後は、“ 北風と太陽 ” の “ 太陽 ” 的なアプローチが大きな意味を持つのではないだろうか。隊員は、配属先（IML）の日本語関係者の人間関係を改善しようなどと大上段に構えることなく、まずは十分時間をかけて準備をし一回一回の授業を丁寧に行い、教育の質を上げる努力をし、それとの関連で、可能なところから話し合いの場を少しずつ広げていくとよいだろう。単に、“ 信念 ” や “ 使命感 ” に燃えて突き進むような、直線的な強引さは禁物である。それがスタンドプレイ的で、自己満足的な活動に終わることの多いことを私たちは経験から学んでいるはずである。（写真⑦）

３．在バングラデシュ日本大使館

(1) 堀口大使は、教育分野での協力活動に大変強い関心をお持ちで、日本語教師隊員の派遣について積極的な意見をいただいた。

① バングラデシュの発展は教育分野の開発なくしてはありえない。

② バングラデシュでは日本語を学ぶ十分な incentive がないのが一番の問題であると思う。それをどうしていくかバングラデシュ人自身が考えることも大切だが、我々も考えなければならない。

③ バングラデシュ人の教師の日本語のレベルが低く、教師がわかからないことは学生にも教えられないので、レベルがいつまでも上がらないのではないだろうか。JOCV の存在は、規範となる「日本語が話せる」というだけでも価値があると思う。

④ ラジシャヒ大学とクルナ大学に日本語コースがあり、バングラデシュの日本語教育を活性化するためにも、その 2 大学への隊員派遣も検討願いたい。

さらに、現在バングラデシュでは韓国語人気が急激に高まっており、その背景として、韓国政府がバングラデシュ国内に 10 万人規模の雇用を提供したことが大きいことを説明された。

(2) 新田一等書記官、進藤二等書記官と大使館の留学アドバイザーであるラハマン多美恵氏と、主に IML（隊員配属先）について意見交換を行った。

進藤書記官からは、草の根レベルの活動でしっかりと日本語教育支援を行い、日本語教室の向こうに“日本”を感じさせること、“日本の存在”を示すことが incentive につながるという意見をいただいた。また、国際交流金専門家派遣終了の経緯として以下のような説明があった。

① 派遣終了間際の 96 年当時は、政治的に大変荒れている時期が長く、大学も長期間機能しなかった。

② バングラデシュの社会では、外国人に発言権は認められず、“上の者”が“下の者”に理解を示すのは難しいことから、学科内で良好な人間関係を築けなかった。

③ 国際交流金側がダッカ大学への専門家派遣の効果がみられないとして、終了後現地での教師採用の助成を行うことで経過を見ていくという方向で、専門家派遣の終了が決定された。

ラハマン多美恵氏は、バングラデシュ人のご主人を持つ在バ日本人で、国際交流基金から IML に派遣された最後の専門家の時代から日本語を教えていらっしゃる。バングラデシュの日本語教育全般について、IML の日本語学科の現状についてよく把握されていた。同氏からの現状説明は以下の通りである。

① 専門家派遣が終了してから、特段レベルが下がったとは思われない。

② バングラデシュ国内での日本語能力試験の実施（2000 年ダッカ受付開始、2001 年ダッカにて実施開始）を受け、学習者は実際的な目標を持って学習できるようになった。

③ 教師については、基礎を固めることが大切だと考える。

④ JOCV には、学習者のレベルアップの支援を期待する。特に、日本語能力試験 2 級合格を目指す、学科内の優秀者の学習支援を期待する。

⑤ 学科内の人間関係は、学科長（上に立つ者）が他教師たち（所属する者）に意見を求めるようになるなど、以前に比べるとよくなってきている。

(3) 団長所感

以上から、バングラデシュの上下関係の厳しさ、良好な人間関係を築くことの難しさが把握でき、最高学府であるダッカ大学への日本語教育支援ではあっても、単純に国際交流金の専門家なら何とかできるというようなものでないことが十分理解できた。

大使館での意見交換では、バングラデシュへの日本語教育面での協力方法について以下を確認することができた。

① バングラデシュの日本語教育については、それを専門的な“日本語教育”という狭い領域で考えてもあまり有効ではない。専門家派遣の歴史に学び、協力の姿勢を模索する必要がある。

② ひとつの姿勢として、同国への日本語教育面での支援は、JOCV のような草の根的な地道な活動を長期にわたって展開することが有効なのではないだろうか。

４． 他日本語教育関連機関　（大学、民間語学学校等）

(1) ダッカ大学 Japan Study Center

① 機関概要

隊員配属先である IML と同じ大学内にある、日本研究を主目的として 2002 年に設立された機関である。所長の Ataur Rahman 氏から概要を伺う。同センターでは、1 年で日本の政治や日本社会などについて学び、修了時に Post Graduate Diploma が取得できる。学生の入学動機は、日本への単純な興味からや、文科省の奨学金を得て日本で勉強するため、よい機関だと聞いて就職に有利に働くと思ったため、などであった。

② 団長所感

Rahman 氏は、日本留学の経験に加え、シカゴ大学で Ph.D を取得していることから、米国の優れたアジア研究者、日本研究者等との交流もあったはずである。現在のダッカ大学では、政治力、指導力、説明能力、先見性などにおいて群を抜いているように思われるので、今後影響力を強くする可能性があり、マジョリティーのバングラデシュの関係者が彼に対抗するのは難しいのではないだろうか。注意深い観察が必要だろう。氏自身、現在の課題もしくは最大の問題は、修了者の活躍の場を探すことだと明言している。

しかし、Japan Study Center は、日本語教育に重点があるわけではなく、あくまでも日本研究的な活動にねらいがあるので、JICA としては、ひとつの日本研究機関と捉え、不用意に、日本語教育に限定した計画などに結び付けないほうが賢明であろう。

(2) Jahangir nagar University

ダッカ近郊にある国立大学であり、外国語公開講座の中に、英語、フランス語、ドイツ語と共に日本語コースを開設している。2004 年の学習者数は 10 人であり、その内の 2 名の学習者に会うことができた。2 名とも専攻は生化学だが、彼らの教授が日本に留学していたことがきっかけで日本語を勉強し始めたが、大学が用意したコースは 60 時間であり、その先の勉強ができないという。日本国内などで一般的な初級の学習時間 200～300 時間と比べたらまだ入門段階というべきだが、日本留学を夢見て、コース終了後も、教科書をノートに書き写したりして熱心に自己学習を続けている姿が印象的だった。

<コースについて>

・使用テキスト：　新日本語の基礎、Japanese for Young People
・コ　ー　ス：　5 ヶ月コースの 1 クラスのみ
・ク　ラ　ス：　1 コマ 60 分、総時間数 60 時間
・料　　金：　当大学学生は 800 タカ、外部者は 1600 タカ

(3) Royal Global Network Nobel Institute（民間語学学校）

校長は IML 日本語コースで日本語を勉強し日本留学した人。英語コースもあり、主にイギリス、アイルランド、日本へ留学を考えている人たちの留学準備・手続きのサポートを行っているようである。日本語のクラスは現在学生 10 名。少し厳しく、留学斡旋を業とする教育ビジネスの域を出ていない組織と見ることもできるだろう。

<コースについて>

・使用テキスト：　新日本語の基礎
・コ　ー　ス：　6 ヶ月コース、1 年コースの 2 コース
・ク　ラ　ス：　1 回 90 分、週 3 回。総時間数 100 時間。
・料　　金：　6 ヶ月 10,000 タカ、1 年 20,000 タカ

(4) JUAAB（JAPANESE UNIVERSITIES ALUMNI ASSOCIATION IN BANGLADESH）

日本留学経験者による組織。ダッカ市内の庶民的な地域に事務所を構える。現在、300 人の会員を抱える。会員になる条件は、単に日本留学経験者ということではなく、日本の大学で学士、修士、博士のいずれかを取得していることである。

① JUAAB 設立の経緯

10 年前に一度同じような組織を立ち上げたが、活動方針が決まらず消滅した。2000 年に日本大使館からの働きかけで、以下の 2 点を目的に新しく現在の JUAAB を復活させた。財政面では、大使館から全面的な協力を受けている。

a.バングラデシュと日本の友好の架け橋となる。
b.会員の留学経験を活かし留学希望者に情報提供をする。

② 主な活動

a.留学生へのアドバイス業務（セミナーやワークショップを通して会員のノウハウを伝える。

b.日本語能力試験を実施する。

c.ベンガル語スピーチコンテストを開催する。

d.日本語コース・日本生活紹介コース（ライフオリエンテーション）を提供する。

③ 会長、役員との協議

会長とダッカ大学の Japan Study Center の Ataur Rahman 所長とは旧知の間柄のようであり、お互いの専門や立場を尊重し協力し合っているようである。IML については、日本研究的な専門機関として、JUAAB とは違う立場であると捉えているようである。いつか１つの建物の中に日本についてのさまざまなコースやプログラムなどを含む“大学”のような組織を作ることができたらというのが、会長はじめ JUAAB 役員の大きな夢であるという。

JUAAB 関係者は、IML、Japan Study Center、JUAAB の 3 組織の立場を以下のように明確に認識しているように思われた。それは、日本側が今後 All Japan として協力していく上で参考になると思われる。(写真⑧)

IML	……	日本語教育専門機関
Japan Study Center	……	日本研究専門機関
JUAAB	……	日本留学等に関するトータルサポート組織

④ 団長所感

バングラデシュ、それも何十年も前のバングラデシュで、日本文部省の奨学金を得て日本への留学が果たせる学生は、エリート中のエリートに違いない。留学中、日本でもさまざまな困難があったに違いない。今日でも高い学位をとるために滞日が長くなればなるほど経済的な困窮を味わう留学生が多い。それらをすべて乗り越えて、日本で博士号を取得してバングラデシュに戻った方々は、それだけでも尊敬に値する。名古屋大学で博士号を取得した会長はじめ東大、長崎大学などで苦労して学位をとった方々は、日本の、文部省奨学金、大学などでの予備教育としての日本語教育、高等教育機関における留学生教育、ホームステイでの受け入れなど、多方面にわたる長年の努力の結果実った“宝物”　的な方々ではないだろうか。

集まってくださった方々は、今日のバングラデシュ社会ではごく少数の“成功者”で、最上級の地位を持ち、別に JUAAB の活動などしなくても、社会的・経済的・文化的に、十分豊かな生活を享受することができるはずだが、青春時代の日本留学という“原点”から湧き出す熱い思いから、何かできることをしたいと感じていらっしゃるように思われた。私利私欲が感じられないところが貴重であり、超党派的な組織という点も重要である。その方々の自然で素朴な夢に重なっていくような日本側からの支援・協力も、地味ではあるが、確かなものが期待できそうだ。JUAAB を、単に日本留学の思い出を語り合う“同窓会”的なもの、“仲良しクラブ”的なものにするかどうかは、私たちの責任でもあるのではないだろうか。

５．他職種隊員派遣機関

9 月 21 日には、菊池シニアの案内でマイメイシンン県の初等教育訓練機関(PTI)と郡リソースセンター(URC)を訪ね、22 日はガジプール県の初等教育訓練機関とサッカー連盟を訪問した。

<団長所感>

PTI で麻生有香隊員、合田治美隊員、井坂剛隊員に会い、URC で米山義範隊員、井上貞行隊員に会う。その後、昼食をしつつ意見交換する。それぞれが輝いている。

マイメイシンンからの帰りの車中の 4〜5 時間は、米山隊員、麻生隊員、合田隊員、井坂隊員と話す。皆、しっかりしている。魅力的な青年ばかり、この国の地方で、ベンガル語を使って生き生きとしている彼らのプレゼンスこそが貴重。出張のたびに必ず出会うことだが、彼らの地元の住民との何でもないやりとりを見ていると、たとえ教室では日本語を多く使う日本語教師隊員でも、現地語訓練がいかに重要かが痛感される。

夕食をともにしつつ、菊池勇シニアと意見交換をする。素晴らしい人柄に接し、ここでも、JOCV が長年にわたって貴重な人材を育ててきたことを再確認する。(写真⑨)

21 日、カジブール県の PTI で、工藤昭征隊員に会い、校長の話を伺う。同隊員が校長に十分信頼されていることがよくわかった。校長が強調したことは、①任期は 2 年より 3 年のほうがよい。②マイメイシンでもカジブールでも、現職参加の隊員の強さを感じた、ということだった。この校長は、今後この分野での JOCV 活動を展開する上で、彼女がどこの学校に移ろうとも、キーパーソンの一人と考えてよいのではないか、という印象を得た。

ダッカスタジアムで三田智輝隊員に会う。5 時からの少年サッカーの練習に同行したが、外国人を見ることの少ない地域だそうで、子供を中心とする大変な数の見物人、即席の売店ができるほどだった。三田隊員は人間的な魅力にあふれた隊員で、少年たちに十分信頼されていること一目瞭然である。協力隊が指導理念として謳う“人づくり”“国づくり”に繋がる活動を模索するためのケース（事例）とすることができるだろう。なお、協力隊が現地語の訓練を重視していることの貴重さも再確認した。

Ⅳ． 団長総括

今回の出張では、日本語教師隊員派遣の歴史の長いスリランカと、最初の日本語教師隊員の活動が始まろうとするバングラデシュを訪れ、視察・調査・巡回指導を行った。重要と思われる事項は以下のとおりである。

１． スリランカ

(1) マハラガマ NYSC は一日も早く派遣再開をする必要があると判断した。配属先は JOCV が自身の都合で派遣を中断した後、規模を大幅に縮小してでも日本語クラスを維持している。JOCV は協力する責任があるだろう。

(2) 近い将来、もし観光に関係する日本語教育を考えるとしたら、その最も条件のよい場所、機関はどこか、協力方法で留意すべきことは何か、などについての試案を用意する。

(3) スリランカの日本語教育全体に対する協力を“All Japan”として考える際、ケラニア大学への国際交流基金の専門家派遣継続は不可欠であるが、基金は、専門家へはもちろん大学に対し文書（job description）を提示する必要がある。

(4) スリランカ日本語教育協会は、隊員の派遣開始後 20 年になるスリランカ日本語教育界の中心的な機関であるが、引き続き派遣継続の必要が高い。同機関が旧大使館講座であることを考えると、少なくとも主教材は、日本の出版社の持つ版権への配慮などが必要となる。オリジナルテキストを編集・刊行、その定着を見る段階が JOCV 協力終了の目安とするのもひとつの考え方であろう。

(5) サバラガムワ大学の日本語コースは、JOCV が尽力して作り上げてきたものだが、ケラニア大学とは違った特色を確認しつつ、質的な向上を課題とすべき時期に来ている。今までを総括し、今後を展望することが望ましい。

２． バングラデシュ

(1) バングラデシュ最初の日本語教師隊員の配属先ダッカ大学 IML での活動をとくに慎重に、大切に、息長く展開する。しかし、ある段階で総括をし、中長期の協力方針を複数用意する。なお、24 年間にわたる基金日本語教育専門家の活動から多くを学ぶことは不可欠である。惰性的・自己満足的な協力活動にしないための具体的な努力が必要だろう。

(2) 他に日本語教師隊員の活動可能な場がないか急ぎ検討する。これは、硬直化が否めないダッカ大学の日本語コースを活性化する意味でもとくに重要である。今回の調査では、まだ“小さな芽”ではあるが、超党派、非営利という特徴をもつ元留学生協会 JUAAB が注目に値する団体だと思われた。

３．全体総括（今後の課題）

ここでは、協力隊の日本語教師隊員派遣に関連する問題を総括し、今後の課題としたい。とくに日本語教育については、昨年10月、同じ外務省を主務官庁として独立行政法人化したJICAと国際交流基金が、どのように役割・責任を分担し、また、協力するかが厳しく問われている時期であるが、今回訪れたスリランカとバングラデシュでも、少なからずそれが問題となった。

スリランカでは、協力隊が20年間派遣を続けている隊員（ある時期まで2名体制）は、その配属先において、やはり24年間にわたって別の機関（大学）に基金が派遣している専門家と共に活動するという長い歴史があり、隊員の報告書には“葛藤”についての記述が少なくなかった。

バングラデシュでは、基金が20年間あまり専門家を派遣し続けた機関（大学）に初めて日本語教師隊員が入ることとなった。協力隊の特色は何なのかが今後ますます問われるようになることは必至である。

(1) 国際協力（技協サイド）における日本語教育の意味づけを吟味する。スポーツを含む教育など文化分野の業種が果たす役割を確認する。

バングラデシュの堀口日本大使は、「バングラデシュの発展は教育分野の開発なくしてはありえない。」と明言なさった。

隊員が、スリランカでバレーボールを指導するのに接しても、バングラデシュでサッカーを指導するのを見ても、それは単にスポーツの指導でないことが実感される。

逆に問うてみてもよいだろう。協力隊はこの40年間、途上国の“国づくり”と“人づくり”をスローガンとしてきたが、では、意識的・自覚的な“人づくり”は、具体的にはどのようにして実現されるものなのだろうか。技術面の協力活動を行なう過程で“人づくり”が行なわれるのと同様に、教育・文化面での活動を通して“人づくり”が行われることを確認しないと、大切なものを見失うことになるように思う。

(2) 日本語教育関係の(政府関係機関の)協力方法を整理する。そのひとつとして、JICAは“オフロード”と“マンパワー”、基金は“オンロード”という捉え方があるだろう。

日本語教育関連の政府関係の協力事業は、主にJICAと国際交流基金が担当するが、今後は、今まで以上に、事業の妥当性等について説明責任が問われる。しかし、わかりやすい整理は容易ではない。

現在のところ、すなわち基金の日本語教師派遣の、選考方法、派遣前研修（訓練）などが大きく変わらないかぎり、生活条件、教育環境などが十分に整っていない国、地域、機関での活動はJICA派遣の日本語教師のほうが適しているだろう。それは、次の３．で触れる外国語運用能力についても言えるし、多くの国に事務所を置くJICAのネットワークの強さを生かすという点でも説明できるのではないだろうか。

また、とくに協力隊の場合、“マンパワー”について、“単なる役務提供”という表現などで否定的に捉えることなく、むしろ“信頼され、敬愛されるマンパワー”として活動することの意義を、派遣前訓練などで確認することが大切だと思う。

(3) 任国で使用する言語の訓練重視の方針を堅持する。現地語の十分な運用能力はJOCVが大切にしなければならないもの。それは、“オフロード車”の“タイヤ”のようなものである。

“草の根的な”活動は、任国で使用する言語の運用能力が十分あるほうが行いやすい。その国のエリートだけではなく、“普通の人々”に受け入れられるようになるために、言葉がどれほど大切か、言うまでもない。スリランカのキャシー・リッチ記念食品加工研究所長は、隊員のシンハラ語でのコミュニケーション能力が非常に高いことに触れ、それがあってこそスリランカの“普通の人々”と語り合うことができ、彼らの信頼を得たのだと述べた。

協力隊は、40年間近く、一貫して派遣前の訓練において、また赴任後の任国において、外国語学習を重要視してきたが、その成果を確認し、さらに充実させる努力が求められるだろう。

(4) JOCVは、その発足時の理念どおり、多くの素晴らしい人材を育むボランティア派遣事業であることを確認する。

活動中の隊員はもちろん、出張中世話になった調整員の方々、シニア隊員の方などに接していて、今回もそれを痛感した。JICA スリランカ事務所長も隊員経験者（それも日本語教師）と伺った。バングラデシュの教育省で初等教育アドバイザーとして活動する長岡康雄氏も PNG の日本語教師隊員経験者である。JOCV が発足時から掲げている理念の一つが見事に実現されている典型を確認することができる。

(5) 協力隊のシニア隊員の役割が重要であることを確認する。今後、協力隊が協力活動の質を高めようとすれば、少なからず、一般隊員とSVには期待しにくい仕事が出てくる。

帰国後の技術顧問室で、シニア隊員を要請する調整員の文書に接したが、この認識は鋭く、貴重なものに思われた。以下、その部分を転載したい。

「…今回の要請内容の範囲は、単なる授業実施に係る活動に留まらない広範囲、且つ難解な内容が含まれる。かかる業務を円滑に遂行するためには、海外での活動経験が全くない人材が派遣される可能性がある、隊員、SVでは実施が不可能であり、…」

20 年間という長期にわたって隊員を派遣しつづけてなおその機関専用の教科書作成が行なわれないことの一因は、私たちが、実力のある隊員経験者などを活かし、より専門性の高い協力活動のために、シニア隊員を派遣することに積極的でなかったことにあると思う。

謝辞

今回の出張では、多くの方々にお時間をお割きいただき、貴重なお話を伺いました。

スリランカでは、日本大使館の大西一等書記官、松尾一等書記官、森山三等書記官に多くを教えていただきました。また、ケラニア大学のラトナヤカ氏は、日本語教育をめぐる現状を整理し、今後の重要課題などを提示してくださいました。JICA 事務所での Pucnchibanda 博士のご講義は、長年の研究に裏打ちされた示唆に富むものでした。

バングラデシュでは、堀口大使、進藤一等書記官の、日本語教育の今後についてのきめ細かなご配慮を痛感しました。また、ラハマン多美恵氏が、バングラデシュにおける日本語教育の厳しい環境について教えてくださいました。

また、スリランカ事務所の村松調整員、バングラデシュ事務所の田坂調整員と菊池シニアには、計画段階から、何から何まで大変お世話になりました。このような調整員が見守る中で活動できる隊員たちは幸せだと思います。

以上

巻末資料

１.「スリランカ日本語教育分野巡回指導調査団」対処方針

２.「バングラデシュ日本語教育分野巡回指導調査団」対処方針

３．隊員配属先日本語コースの現況

４．写真

巻末資料１.「スリランカ日本語教育分野巡回指導調査団」対処方針

2004 年 8 月 30 日

調査項目	現状及び問題点	対処方針
1.スリランカ日本語教育事情		・活動中隊員の現場や、関係機関を視察し、スリランカにおける日本語教育の現状及び問題点を総括的に把握する。また、隊員に対する指導助言や今後の派遣計画の検討を行う。
2.スリランカ事務所の隊員派遣についての方針・意向	青年海外協力隊の派遣は1981年に始まり、現在までに42名（一般隊員39名、一般短期隊員2名、シニア短期隊員１名）派遣されている。日本語教師隊員派遣は1985年に始まり、現在、3名の日本語教師隊員が活動を行っている。それぞれ商業首都のコロンボ（スリランカ日本語教育協会）、山間部のベリフルオヤ（サバラガムワ大学）、中規模都市のゴール（ゴール技術訓練短期大学）に派遣されている。 上記のサバラガムワ大学・ゴール技術訓練短期大学以外に、高等教育機関では２つの大学で日本語専攻コースが開講されており、首都に近く、比較的レベルも高い大学に国際交流基金の専門家およびシルバーボランティアが継続派遣中である。 初・中等教育機関に関しては、平成15年7月を持って隊員派遣は終了。中学修了および高校修了時のテスト（後者は大学入学試験に相当）の外国語選択科目として日本語が学習されており、年々学習者が増加しているが、受験科目・暗記教育のもとに日本語教育が行われているため、カリキュラムやシラバスの設定、教科書整備、教授レベルには偏りがあると言わざるを得ないため、現在のところ明確な派遣計画はない。	①ス国における日本語教育の目的並びに今後の計画及び将来性を調査する（英語重視の国での日本語教育のあり方）。 ②国別事業実施計画の中での日本語教育の位置づけを確認する（現地事務所の意向確認）。 ③国別援助計画の中で、環境保全型観光開発分野に対する支援が重点分野として挙げられているが、日本語教育支援が日本語観光ガイド育成など、観光産業につながる可能性の有無を確認する。
3.協力の現状及び派遣中隊員の活動状況 ①隊員の活動状況及び問題点の把握 ②配属先日本語コースの現状及び見通し ア．日本語コースの位置づけ イ．コースの到達目標、到達レベル ウ．指導対象者（学習者） エ．ＣＰ情報（ＣＰの人数、日本語能力指導可能レベル等） オ．コースの総授業時間数	サバラガムワ大学(15-3 高嶋友子)　任地：ベリフルオヤ **①配属先概要** 1993年派遣開始。6代目。 配属先の大学は、隊員派遣開始当時（1993年）は3年生の大学ではなく2年生の短期大学で、日本語の授業は商学部観光学科の学生を対象に行われていた。その後、大学に昇格するにあたり社会科学言語学部言語学科を設け、日本語を主専攻、副専攻、選択科目として開講した。現在、スリランカにおいて学部レベルで日本語を専攻できる大学は、当サバラガムワ大学とケラニア大学（国際交流基金専門家派遣中）のみである。 当初は人材不足の穴埋めであったが、その後現地人教師の採用を経て、現在は現地人教師と共に授業や試験作成、成績処理などを行い、カリキュラム作成や教材作成は隊員が行っている。コースは全体的に充実度を増し、調整・見直しの段階に入っている。配属先から隊員へは、現地人講師のレベルアップと増加傾向にある中級レベル学生への直接指導、CPの授業準備の補助が望まれている。今後も協力の必要性は高いことから派遣に関しては現状を維持していく予定である。	①派遣中隊員の活動現場を視察し、隊員から活動に関するヒアリングを行うとともに、必要に応じ技術面での助言を行う。今後の派遣方針についての検討を行う。 ②学生の専攻動機、学習の到達度、進路動向について把握し、今後の協力のあり方の判断材料とする。

カ．隊員担当科目及び指導レベル キ．配属先の施設・設備の確認 ク．期待されている隊員の活動内容 ケ．学習者の進路	〈コース概要〉 ○主専攻（Japanese Studies） 　日本語Aレベル試験（大学入学資格試験）に合格した学生のためのコース。Aレベル試験合格と同等の日本語能職があると認められた学生は取ることが可能である。中級レベルの日本語を学ぶ。また、日本語だけではなく日本事情や文化（社会、経済、政治、文学）についても学ぶ。卒業時には、日本文化に関する卒論を提出し、日本学（Japanese Studies）の学位を得ることができる。3年間の総学習時間は720時間。 ・コースの到達目標 　日本語能力試験2級合格目標 ○副専攻（Japanese Language） 　初めて日本語を学習する学生のためのコース。日本文化や日本事情を含まない、日本語のみを学習するコース。3年間で初級終了を目標としており文字も学ぶ。副専攻で日本語を選択できるのは社会科学言語学部の学生のみである。3年間の総学習時間は540時間。 ○選択科目（現地人教師が担当する） 　商学部観光学科の学生対象のコース。学生は初めて日本語を学習する。2年生から授業を開始し、2年間の総学習時間は240時間である。 〈隊員に求められている業務〉 ・中級クラスの授業 ・現在ある教材の改善及び新しい教材の作成協力 ・中級クラスで使用する読解教材や視聴覚教材の選択 ・現地人講師のレベルアップ ・CPの授業準備の補助・CP作成試験のチェック 〈学生の日本語学習動機〉 　日本語はシンハラ語と類似点があるので、初級に限っては学習しやすくテストの点も取りやすいという理由や、日本や日本文化に対する興味から履修した学生が多く、就職のために勉強している学生はほとんどいない。 **②カウンターパートについて** 3名（現地人講師） Permanent staff：２名 1名（Snior Lecturer）：日本在住20年。日本の僧侶としての資格保有 　　駒澤大学で博士課程修了(仏教学) 1名（Instructor)：国際交流基金の長期研修参加済 　　日本語能力試験2級合格	③各コース修了時のDiplomaの有無、またDiplomaの効果について確認する（どのように学習者のやる気につながっているか、就職に有利に働くか等）。 ④短大から大学昇格についての総括

	Temporary staff：1名 1名（Instructor）：2003年9月より国際交流基金長期研修参加 日本語能力試験2級合格 **③JOCV活動の成果** １）3年制の正式な国立大学に昇格するためのコースデザインの再設定、シラバス作成（日本語未者習者用シラバス、既習者用シラバス）、テキストの見直し（配属先であるサバラガムワ大学は1995年にスリジャヤワルダナプラ大学の短期大学部から正式な国立大学に昇格） ２）新しい教科書の選定・導入（日本文学、漢字等） ３）各セメスター前の日本語教師ミーティング導入 **④問題点** １）他の外国語学習との違い、日本語学習の習熟度の違いを大学側が理解していない。そのため、他言語と同様の成果を求められる。 ２）大学で教える日本語教師に求められるレベルが明確ではないため、ある程度授業ができる現地人教師のレベルをどこまで上げれば十分なのかが把握できていない状態で隊員が活動している。 ３）配属先の大学でストライキが多発し、計画通りに授業が進まない。 ４）現地人講師は授業時間外は大学にいることが少ないので、日々の授業の情報交換が難しい。 ５）CPは毎日の担当授業のことしか考えず、日本語コース全体を見ることができていないので、隊員に任されている業務をCPが果たせるようになるまで時間が必要である。	
	ゴール技術訓練短期大学（14-3　岡村佳代子）　任地：ゴール **①配属先概要** 　1998年派遣開始。 　職業訓練を目的とする短大において全国37校のうち中規模都市の1校で小規模な日本語教育が行われている。現在4代目となる隊員が派遣されているが、雇用機会の少ない当国において日本語を一技術として就職に結びつけるのは更に困難であるため、現在派遣中の隊員をもって派遣を終了する予定である。 　隊員に期待される業務は、クラス運営及び現地人教師に対する日本語教授法の指導、シラバスやカリキュラム・副教材の改善、整備等である。	①派遣中隊員の活動現場を視察し、隊員から活動に関するヒアリングを行うとともに、必要に応じ技術面での助言を行う。 ②隊員派遣終了までと終了後の２つに分けて、見通しについて整理する（今後のコース運営、学科の見直し、他機関との違い等）。

	〈コース概要〉 　南部地域唯一の正式な日本語コース。週5日、1日５，６時間、日本語のみを1年間学習する専攻コースである。 ・コースの到達目標 日本語能力試験3級・4級及びスリランカ国内のAレベル試験（General Certificate of Education Advanced Level）合格 〈学生の日本語学習動機〉 　職業訓練校の日本語コースということで、日系企業への就職に有利と考えて入学するものもいるが、多くの学生は日本語を学べば職につながると短絡的には考えてはいない。ただ単に日本語を学びたい、資格のひとつとして学びたい（Aレベル試験合格は就職に有利に働く）という2点が大きい動機である。 **②カウンターパートについて** 1名 女性。農業研修で1年間の日本滞在経験がある。日本語運用能力はあるものの、体系的に日本語を習った期間が3ヶ月と短いので日本語文法の理解が浅く、全体的な日本語能力レベルは日本語教授をするに至っていない。 **③JOCV活動の成果** １）シラバス・カリキュラム等コースの基盤整備 ２）副教材（聞き取り教材、漢字教材等）の作成 ３）学生の就職状況の改善 　前任者は、日本語を学びに来る学生の希望である日系企業への就職が可能なのかどうか、可能性を上げるためにはどうすればいいのか、若しくは可能性がないのであれば隊員の派遣自体を考え直す判断材料にするために企業へのアンケート及び日系企業訪問を行った。その結果、アンケートでは、労働力確保のためにスリランカに会社を設立している企業が多いことから、低賃金の単純労働者を必要としていて、採用時に日本語能力を必要としている企業はほとんどなく、また、事務員採用時に必要なものも高いレベルの英語とコンピューターであり、日本語は必要ないことが分かった。 　企業訪問では、1社から、日本語科の卒業生に半年間のトレーニングプログラムの提案を受けるに至った。 ４）CP養成 　日本語教授習得を目的に、コース開講当初1年間、CPは隊員の授業見学をしていたが、現在は隊員と授業を分担している。隊員は日本語コースのサポート役に回ることを目指し、CPの日本語と授業の準備・復習をチェックし、CPの単語や文法の知識の整理を手伝っている。	③コース修了時のDiplomaの有無、またDiplomaの効果について確認する（どのように学習者のやる気につながっているか、就職に有利に働くか等）。

	④問題点 １）CP問題（現在のCPの問題・今後のCP増員の見込み） ・CPの日本語能力レベルの低さ。勉強不足（漢字、作文能力などは著しく低い）。 ・CPへの指導時間が限られているのでCP育成が思うように行かない。 ・CPは非常勤講師であり、実質、隊員がコースで唯一の常勤スタッフである。立場上、CPは表に立って交渉しにくく、隊員が直接学校側と細かい交渉を行わなければならない。 ・現行のカリキュラムでは学習者のニーズに対応できないが、新規コースを開設するには講師が足りない。 ２）職業訓練校の日本語コースとしての存在意義 ３）他の日本語教育機関とどう連帯を取れば効果があがるのか。	
	スリランカ日本語教育協会（14-3　小林円）　任地：コロンボ **①配属先概要** 　1985年派遣開始。配属先はかつての日本大使館による日本語講座を前身とする。現在は、2002年末までに試験的移管期間を経て、JASTECA（AOTSスリランカ同窓会）が経営母体である。 　約10代にわたって十数名の隊員が派遣されており、（複数同時派遣あり）中学校卒業程度の16歳から50代まで幅広い学習者（約450名）を対象に夜間や週末コースも開講しており、当国における日本語教育の中核的存在である。広く一般に門戸を開いた社会人対象講座としての当国における存在意義は高い。 　以前に比べて現地の体制が整ってきており、現地の教師のレベルも上がり、中級クラスまで担当しているものの、中・上級クラスの指導力は十分と言えず、隊員へは教授法の知識や実習を含めた講師養成や中上級レベルの授業担当を求められていることから、今後も隊員派遣は継続的に行っていく予定である。 〈コース概要〉 　コースは入門・初級・中級・上級と大きく4つに分かれ、その中でさらに2つずつ分かれ（入門１・２、初級１・２、中級１・２、上級１・２）全部で8つのレベルに分かれている。更に、初級から中級の間にプレップクラス（中級へ入るためのクラス）、大学入試対策としてAレベル対策クラスなどが必要に応じて設けられている。平日は午後のみ、土日は午前・午後と授業が行われている。入学資格は16歳以上。 **②カウンターパートについて** スリランカ人教師9名（常勤2名、非常勤7名） 日本人教師1名(非常勤)	①派遣中隊員の活動現場を視察し、隊員から活動に関するヒアリングを行うとともに、必要に応じ技術面での助言を行う。 ②学生の日本語学習動機、学習の到達度、進路動向について把握し、今後の協力のあり方の判断材料とし、今後の派遣方針についての検討を行う。 ③現地人教師のレベル及び日本人教師の雇用状態を把握し、JICAボランティアの協力の必要性の判断材料とする。 ④各コース修了時にもらえる修了書の有無、またその効果について確認する（どのように学習者のやる気につながっているか、就職に有利に働くか等）。 ⑤大学等よりも質・量、共にしっかり日本語を学べる機関としてのステイタスを持つに至った総括

	③JOCV活動の成果 １）事務業務の現地人職員への移行 　初代隊員派遣当初から長い間、隊員が中心となって配属先の事務業務を行ってきたが、現地人の事務職員も確保され、隊員主導の事務から現地人主導に変わりつつあり、運営面で配属先が自立してきている。 ２）現地人教師の養成 　隊員が現地人教師の授業を見学し各教師に助言を行ったり、教案の作成方法を教え、現地人教師のレベルアップを図る。 ３）講師会・レベル別ミーティングの導入 **④問題点** １）隊員派遣の歴史が長いため、配属先は全般的に何事も隊員に頼りがちである。所属先は「自立」に向けての意識を持つことが必要である。 ２）教材・教具の整理整頓が徹底されていないため、それらを全て上手く活用できていない。 ３）事務職員1名がいるが、教務担当の常勤講師が事務を手伝わなければならないので、教えることに専念できない。 ４）配属先の同僚教師達には、自分たちの能力向上やコース全体のレベルアップを目指す姿勢が見られない。 ５）中級担当教師から教科書が使いにくい等の意見があり、会話や作文も取り入れた中級シラバス全体の見直しが必要である。 **〈スリランカの日本語教育全体の問題点〉** ・レベルが初級どまりである。 ・日本語を活かせる就職口がない。 ・現地人教師のレベルが上がらない。 ・現地人教師が定着しない（給料が低く、しっかり払われていない。女性教師は家庭の事情を優先させ簡単に辞めてしまう。）。	〈その他〉 ①中等教育から引いた経緯の総括 ②スリランカと日本とのよりよい関係を結ぶにあたり、日本語の有効性 ③どのようなタイプでの日本語教育がより有効か。
４．具体的訪問先	〈派遣中隊員配属先〉 ・サバラガムワ大学(15-3 高嶋友子) ・ゴール技術訓練短期大学（14-3　岡村佳代子） ・スリランカ日本語教育協会（14-3　小林円） 〈その他日本語教育機関〉 ・ケラニア大学現代語学科日本語コース 　国際交流基金専門家、シルバーボランティア各1名派遣中 ・NYSCマハラガマ文化スポーツセンター 　過去、複数隊員派遣あり。現在も隊員要請あり。	

	・コロンボ大学日本文化修士コース 　シルバーボランティアが派遣中。近々日本語コース開設の可能性あり。 〈日本語教育関連機関〉 ・国立教育研究所(National Institute of Education : NIE) 　カリキュラム・シラバス設定、国内統一テストなどを作成している機関であり、言語科の要請を受け、国際交流基金の専門家を中心に1996年11月より8ヶ月間、スリランカ初の日本語教師養成講座が行われた。 ・在スリランカ日本国大使館 　スリランカでの日本語教育関連窓口	調査結果をふまえ、スリランカにおける今後の協力についてスリランカ事務所と協議を行い、派遣方針をより具体的にする。

巻末資料２.「バングラデシュ日本語教育分野巡回指導調査団」対処方針

2004 年 8 月 30 日

調査項目	現状及び問題点	対処方針
1.バングラデシュ日本語教育事情		バングラデシュにおける日本語教育の現状及び問題点を総括的に把握し、隊員に対する指導助言や今後の派遣計画の検討を行う（14年度一般短期隊員がバ国の日本語教育現況調査を行っている。）。
2.バングラデシュ事務所の隊員派遣についての方針・意向	青年海外協力隊の派遣は1973年に始まり、現在までに816名（一般隊員759名、一般短期隊員30名、シニア隊員30名、シニア短期隊員9名）派遣されている。日本語教師隊員派遣は2003年4月に一般短期隊員（14年度）が大蔵省経済関係局に派遣され、2004年7月にダッカ大学に一般隊員（16年度１次隊）が派遣された。 一般短期隊員は日本語教師隊員として派遣されたが、実際に日本語の授業は行わず、バ国における日本語教育の現状調査を行う目的で、日本語教育機関（公的機関6箇所、民間機関6箇所）、日系企業1機関及びJETROを訪問した。日本語学習機関では、機関の概要やコースについての調査と学習者に対してアンケートを行い、学習者の日本語学習目的や学習後の進路などについてアンケート結果をまとめた。日系企業及びJETROでは代表者と面談を行い、（１）バ国経済と日系企業の動向、日本語能力を有する労働者の雇用需要の有無（２）企業側が求める日本語能力を有するバ人労働者の基準の2点の調査を行ない、日本語学習が直接日系企業への就職につながらない理由をまとめた。 また、ダッカ大学では、大学側にJOCVの特徴（国際交流基金の専門家レベルの人材ではないが、正式に日本語教授法を受けた人材の派遣等）の理解を求め、内部現況調査、隊員が受け持つ業務の確認を行い、日本語教師隊員の受入体制を整えた。 同配属先には、1974年より国際交流基金専門家が派遣されていたが大学内の不安定な状況や国際交流基金の協力方針の転換などを理由に1998年に派遣終了。その後、同大学は日本人日本語教師の重要性を認識し、多方面での活躍で知名度の高いJOCVの派遣要請に至った。 同じ配属先にJOCVを派遣することに関しては、バ国側にJICA事務所と大使館が協力して受入体制整備を働きかけた結果、「日本語コースミーティング」等が開始され、常勤講師2名の募集がなされるなど、日本語コース改善に向けた取組みが見られ、配属先からは日本語コースの基礎固め及び、日本政府寄贈のLL教室・視聴覚関係機材の教室活動への効果的な活用も期待され、JOCV派遣を決定した。	①バ国における日本語教育の目的並びに今後の計画及び将来性を調査する（英語重視の国での日本語教育のあり方）。 ②国別事業実施計画の中での日本語教育の位置づけを確認する（現地事務所の意向確認）。

	20数年にわたった同配属先への国際交流基金の協力内容・協力結果をふまえ、配属先・隊員本人・JICA事務所及び協力隊事務局など関係者間において、今後のJOCV日本語教師の具体的な活動方針を共有する必要がある。なお、バ事務所は、バ国における日本語教育機関の中心である同配属先に日本語教育分野の協力を絞り、まず中央機関としての日本語教育レベル向上に努めることを目的とし、派遣効果発現のためには、活動期間を6年程度、派遣代数を3代とするのが妥当と考えている。	
3.協力の現状及び派遣中隊員の活動状況 ①隊員の活動状況及び問題点の把握 ②配属先日本語コースの現状及び見通し ア．日本語コースの位置づけ（修了時に取得できる単位・資格があるかどうか） イ．コースの到達目標、到達レベル ウ．指導対象者（学習者） エ．ＣＰ情報（ＣＰの人数、日本語能力指導可能レベル等） オ．コースの総授業時間数 カ．隊員担当科目及び指導レベル キ．配属先の施設・設備の確認 ク．期待されている隊員の活動内容 ケ．学習者の進路	ダッカ大学(16-1 志賀　龍）　初代 ①配属先概要 ・ダッカ大学現代言語研究所 同研究所は1974年に設立され、世界各国の13言語を扱うバ国最大の外国語研究機関である。日本語コースは同研究所設立以前の1972年に国際関係・外国語学部に開講され（74年に同学部の外国語部が独立し現代言語研究所となる）、英語科についで生徒数が多く、約250名がJunior（初級前半）、Senior（初級後半）、Diploma（中級前半）、Higher Diploma（中級後半）コースに分かれて学習する。そのほか日本語能力試験対策コース、就業者を対象とした短期集中コース（2ヶ月程度の読み書きを目的としない会話中心講座）も年2回行われている。 国際関係学部との間で単位制を実施しているものの、実質的には社会人・一般を対象とする社会教育機関である。 〈隊員に求められている業務〉 ・カリキュラム整備のアドバイザー ・コース運営支援 ・授業担当（初級、中級レベルの授業を週12時間程度） ・日本語を効果的に教えるための視聴覚教室及び視聴覚機器の有効利用 ・日本文化紹介行事の企画・運営などへの積極的参加 ・日本語教師研修 ②カウンターパートについて 5名（現地人教師：常勤１名・非常勤４名、日本人教師：非常勤3名） 〈現地人教師〉 常勤1名：修士卒、経験10年、基金長期研修済 非常勤4名：修士卒、経験０～５年、2名基金長期研修済 〈日本人教師〉 1名：元バングラデシュきのこ隊員 1名：現地採用 1名：休職中 （2名の日本人教師は日本語教育の専門的な知識がないため、正式に日本語教授法を学んだ人材の要請となった。）	①JICAボランティアに求められているものを相手側と明確に整理し、どこまで協力を続けていくのが適切かの判断材料とする。 ②日本人教師の雇用状態を把握し、JICAボランティアの協力の必要性の判断材料とする。 ③学生の日本語学習の動機、到達度、進路動向について把握し、今後の協力のあり方の判断材料とする。 ④配属先の治安状況を確認する。 ⑤コース修了時のDiplomaの有無、またDiplomaがあった場合、その効果について確認する（学習者のやる気につながっているか、就職に有利に働くか等）。

	③問題点 ・学習者の減少 　学習者の減少については、Junior コース（初級前半レベル）開始時から授業が進むにつれて起こり、コース終了時には入学者（約200～250人）の30～40％程度しか残らない。最終コースであるHigher Doplomaコース（中級後半レベル）を修了する学習者は入学時の５％程度である。原因としては、コースを履修しても学部の単位にはならないことから、学生は日本語学習の面白さを感じなくなったり、学部の講義と時間が重なって学習時間が思うように取れなくなると学習をやめてしまうことが考えられる（国際関係学部の学生のみ、英語以外の外国語を習得する目的で、1年間のIMLでの外国語クラスの履修が必須となっている。）。 　学習者の減少に対する教師達の問題意識は低く、教師側からの積極的な働きかけがないことも、この問題が解決されない原因と考えられる。 ・非常勤講師の雇用状態 　常勤のポスト4名中、現在、常勤のポストについているのは3名で、そのうち1名は長期療養休暇中、1名は日本留学中で、実質上は常勤1名と非常勤講師6名（うち日本人講師2名）でコースを運営している。 　規定では、非常勤講師は上限週6時間を担当することになっているが、現状は非常勤講師が、上限を超えた週8時間を担当することでコースが成り立っている。しかし、2時間分の超勤手当はつかない。現在の雇用状態は優秀な教師の流出にもつながり、国際交流基金の日本語教師海外長期研修まで終えた人物に関しては、第一線で活躍できず、その能力が十分に生かされていない。常勤の採用に関しては、大学自体の予算や他のコースとの兼ね合いもあるので難しい状況にあるが、改善が望まれる。 ・日本語コース内での教師間の協調性及び親近感の欠如 　教師同士で共に力を合わせて取り組む姿勢が見られない。教師間の結束を促すような仕組み作りへの助言やコース運営支援が隊員に求められている。 ・LL教室及び視聴覚関係機材の利用方法 　日本政府よりLL教室及び視聴覚関係機材（CDラジカセ、ビデオデッキ、ビジュアルプレセンター等）の提供があり、教育環境が著しく向上しながらも、これらの機械の扱い方や活用方法に関して知識が不足しているため効果的に使用されていない。	
①Japan Study Center調査項目 1）設立目的 2）規模 3）IMLとの機能の違い 4）IMLとの連帯について 5）学習者層（年齢等） 6）スタッフ層 7）修了時に取得できる資格 8）施設・設備	〈派遣中隊員配属先〉 ダッカ大学： ・Institute of Modern Languages（隊員配属先） ・Japan Study Center ・（元文部省留学生組織JUAB）	

②元文部省留学生組織（JUAB） に関 １）IML・Japan Study Centerとの関 ２）JUABに対する大使館の意向について		
	〈その他日本語教育機関〉 ・Jahangir nagar University（国立大学）ダッカ市内 1998年にJapanese certificate Courseを開始。初級（1クラス）を開講している。隊員の配属先であるIMLの日本語コースと比べると規模は小さい。 ・Dhaka Japanese Language Institute（民間の語学学校）ダッカ市内 1972年に開校。バ国における日本語教育の普及を目的に日本語教育を行っている。初級・中級のレベル別コースや、特別コース、短期コースなど数種類のコースを開講している。 ・Japanese Kotoba Rainbow Academy （民間の語学学校）ダッカ市内 2003年に開校。初級（1クラス）を開校している。バ人教師と日本人教師（各1名）が教えている。	今後の隊員活動の参考となる情報を収集する（日本語教育のニーズ、学習者の動機、学習者の進路、国立大学との機能の違い等）。
	〈その他〉 ・初等教員訓練機関カジプール　　カジプール県ジョイドプール市 工藤昭征隊員（15年度1次隊・理数科教師）の配属先。同隊員は現職の教員で、日本の教材等を創意工夫し、理科実験等を現地人教師と共に小学生に教えている。このような工藤隊員の活動は、今回新規派遣となった日本語教師隊員が、今後活動を行っていくうえで大変参考になると思われる。 ・Basic Development Partners　ダッカ市 土田理絵隊員（15年度1次隊・理数科教師） ・郡リソースセンター　　マイメイシン県マイメイシン市 米山義範隊員（15年度1次隊・理数科教師） ・初等教員訓練機関　　マイメイシン県マイメイシン市 麻生有香隊員（15年度1次隊・理数科教師） ・郡リソースセンター　　マイメイシン県ムクタガチャ市 合田治美隊員　（15年度3次隊・理数科教師） ・在バングラデシュ日本国大使館	調査結果をふまえ、バングラデシュにおける今後の協力についてバングラデシュ事務所と協議を行い、派遣方針をより具体的にする。

巻末資料３．隊員配属先日本語コースの現況

―スリランカ―　（派遣中隊員回答）

サバラガムワ大学

ア．日本語コースの位置づけ

・主専攻　：　①JPS（Japanese Studies）

・副専攻　：　②JPL（Japanese Language）

イ．各コースの到達目標、それに対する学習者の到達レベル

①JPS　：　目標　－　日本語能力試験2級合格程度を目標としたシラバス作成が進められている。

実際　－　日本語能力試験3級程度。

②JPL　：　目標　－　初級教科書終了

実際　－　会話力が身につかない。

ウ．指導対象者（2004年9月）

・各クラスの学習者数

①JPS　：　1年生26人、2年生17人、3年生3人

②JPL　：　1年生約60人、2年生4人、3年生10人

・日本語学習の目的

主専攻の学生は、日本語教師や日本への留学を希望している者が多い。

・学習への取り組み方

熱心な学生は宿題や課題も期限までに終わらせてくる。概ね真面目である。

エ．CP情報

・CPの人数　：3名

・各CPの情報

ア）①名前　：　A.Vijitha

②年齢　：　50代

③性別　：　男性

④身分（立場）　：　Senior Lecturer　/　Permanent staff

⑤日本語学習歴　：　不明

⑥日本語教授歴及び教授レベル　：

日本語教育の資格は持っていないため、日本事情の講義を担当。学生時代から20年の滞日経験があり、日本で禅宗の僧侶として得度を受けている。流暢な日本語を話す。

イ）①名前　：　S.Kolambage

②年齢　：　30代

③性別　：　女性

④身分（立場）　：　Instructor / Permanent staff

⑤日本語学習歴　：　ケラニア大学 External コース卒業

⑥日本語教授歴及び教授レベル　：

同大学には 4 年前に採用されたが、それ以前にも日本語教授経験のあるベテランで、コロンボ大学のマスターコースにも通った。国際交流金長期研修に参加経験があり、2004 年に同基金の 3 ヶ月研修にも参加した。日本語能力試験 2 級に合格している。

ウ) ①名前　：　D.Ramabukpitiya

②年齢　：　20 代

③性別　：　女性

④身分（立場）　：　Lecturer / Temporary staff

⑤日本語学習歴　：　当大学卒業生。A レベル校と大学で 6 年程度。

⑥日本語教授歴及び教授レベル　：

同大学での経験は 1 年足らずだが、それ以前に寺院の日本語教室で教えた経験がある。3 度の渡日経験があり、日本語能力試験 2 級に合格している。自分自身で漢字や読解が苦手だと認めていて、それさえ克服すれば、中級クラスの指導も十分行っていけるレベルである。

オ．各コースの総授業時間数

・各コース

①JPS　：　1 年生　前期　30 時間　／　後期　45 時間

2 年生・3 年生　文法・聴解　各 120 時間、漢字・文学・作文　各 120 時間、日本文化　各 120 時間

②JPL　：　1 年生　75 時間

2 年生・3 年生　文法 120 時間、漢字・作文・聴解　120 時間

・全コース修了までの総時間数（新シラバス）

①JPS　：　735 時間

②JPL　：　540 時間

カ．隊員担当科目及び指導レベル

①JPS　：　2 年生漢字、3 年生文法、漢字、聴解

②JPL　：　1 年生入門

キ．配属先の施設・設備の確認

日本語専用教室 3 つ、OHP、テレビ、ビデオデッキ、カセットプレーヤー、パソコン（Windows XP）

ク．期待されている隊員の活動内容

授業の実施、シラバス改訂

ケ．学習者の進路

A レベル校日本語教師、日本大使館職員、JICA 専門家秘書

ゴール技術訓練短期大学

ア．日本語コースの位置づけ　：　主専攻

イ．各コースの到達目標、それに対する学習者の到達レベル

目標　：　A レベル（大学入学資格）合格、日本語能力試験 3 級合格

実際　：　0 レベル（高校資格）合格、日本語能力試験 4 級合格

ウ．指導対象者（2004 年 9 月）

・クラスの学習者数　：　1 クラスのみ 18 人

・日本語学習の目的　：

A レベル（大学入学資格）合格、日本語能力試験３級合格、日本語を生かした就職

エ．CP 情報

①名前　：　Padma Jayawardana

②年齢　：　38 歳

③性別　：　女性

④身分（立場）　：　Visiting staff（非常勤）

⑤日本語学習暦　：　1 年

⑥日本語教授歴及び教授レベル　：　7 年、初級

オ．各コースの総授業時間数

・各コース　：　1 学年のみで約 600 時間

・全コース修了までの総時間数　：　約 600 時間

カ．隊員担当科目及び指導レベル　：　全般、初級

キ．配属先の施設・設備の確認

OHP、カセットデッキ、ビデオ、テレビ、ホワイトボード（CD を聞くときはコンピュータールームへ移動する。）

ク．期待されている隊員の活動内容

日本語教授、クラス運営、CP 育成、シラバス見直し、テスト作成、評価、進路相談、就職斡旋

ケ．学習者の進路

日本語教師、日本企業就職、一般企業就職、日本留学、大学進学、看護学校進学、日本語の勉強を塾で続ける、結婚。但し、上記は毎年学生の 5%ほど。それ以外は職もなく家にいる。

スリランカ日本語教育協会

ア．日本語コースの位置づけ　：　一般語学学校

イ．各コースの到達目標、それに対する学習者の到達レベル

入門１・２コース　：　日本語能力試験４級レベル到達

初級１・２コース　：　日本語能力試験３級レベル到達

中級１・２コース
上級１・２コース　｝日本語能力試験２級レベル到達

ウ．指導対象者（2004 年９月）

・レベル別の学習者数　：　入門１　約 140 人　　入門２　約 90 人
初級１　約 70 人　　初級２　約 40 人
中級１　約 40 人　　中級２　約 40 人
上級１　約 20 人　　上級２　約 20 人

・日本語学習の目的　：　大学進学、日本語能力試験合格、日本留学、日系企業等への就職

エ．CP 情報

①名前　：　イロミ　セラナヤカ

②年齢　：　26 歳

③性別　：　女性

④身分（立場）：　常勤

⑤日本語学習暦　：　６年

⑥日本語教授歴及び教授レベル　：　A レベル校にて６ヶ月、日本語教育協会にて８ヶ月

オ．各コースの総授業時間数

・各コース

入門 1～中級 2：各レベル 80 時間（週一回　4 時間　／　週二回　2 時間）

上級１・2：各レベル 80 時間（週一回　4 時間）

・全コース修了までの総時間数

640 時間

カ．隊員担当科目及び指導レベル

現時点では、初級 1、中級 2、上級１クラス担当

キ．配属先の施設・設備の確認

教室３室、机、いす、ホワイトボード、ラジカセ３台、ビデオ１台、コピー機１台、CP1 台

ク．期待されている隊員の活動内容

上級クラス担当（実際は、クラス運営・日本語能力試験に関わる仕事が大半を占める）

ケ．学習者の進路

大学進学、A レベル校及び大学等での日本語講師、日本語塾講師、日本留学、観光ガイド、大使館及び JICA 等の公的機関及び日系企業への就職

―バングラデシュ―　（派遣中隊員回答および前任隊員報告書より）

ダッカ大学・IML

ア．日本語コースの位置づけ　：　第二外国語

イ．各コースの到達目標、それに対する学習者の到達レベル

目標

ジュニアコース　：能力試験４級

シニアコース　　：能力試験３級

ディプロマ　　｝能力試験２級

ハイディプロマ

到達度

どのレベルにおいても目標に到達するのはかなり困難。

ウ．指導対象者（2004年10月）

・クラスの学習者数　：　現在、開講されているのは、ジュニアコースのみ。　1クラス40名前後×5クラス。

・日本語学習の目的　：　日本で修士号取得を希望、語学的関心、日系企業就職希望等

エ．CP情報

CPとして特定される存在はないが、同僚としてバングラデシュ人教師が３名（うち１名は国際交流基金の研修ため来日中）いる。

オ．各コースの総授業時間数

各クラス週に６時間（２時間×3）の時間割だが、ストライキや政治運動などで学校が休みになる事が多く、総時間数ははっきりしない。

カ．隊員担当科目及び指導レベル

隊員は、週に12時間（６コマ）を担当することができるが、現在は、ジュニアコース（初級）の６時間のみ担当。残りの６時間に関しては、他のクラスの開講のめどが立った時点で決められる。

キ．配属先の施設・設備の確認

L.L教室、ホワイトボード、机、ビデオデッキ、CDラジカセ、コピー機、PC、Visual Presenter等

ク．期待されている隊員の活動内容

日本側（大使館・JICA)、配属先、同僚の日本語教師と、それぞれ隊員に期待している内容が異なると考えられ、特定するのは難しい。現隊員は、受け入れ調査票に書かれていた事項は、あまり期待されていないように感じながら活動している。

ケ．学習者の進路

進路希望調査は行われたが、追跡調査は行われていないため不明。

〈参考資料〉　バングラデシュ・ダッカ大学 IML 日本語コースシラバス

Department of Japanese Language
Institute of Modern Languages
University of Dhaka
Syllabus of Japanese Language Course
Session 2004-2005

Syllabus for Junior Certificate Course

Paper-I: Writing scripts
100 marks

1. Pronunciation, reading and writing of *Hiragana*
2. Pronunciation, reading and writing of *Katakana*
3. Pronunciation, reading and writing of *Kanji*-100 Characters

Paper-II: Grammar and Speaking
100 marks

1. Basic Sentence Patterns (1)
2. Grammar
3. Dialogues

Paper-III: Sessional tests & Oral tests
100 marks

1. Sessional tests
2. Oral tests

Prescribed Textbooks:

1. 新日本語の基礎 I *(Shinnihongo no kiso-I)*
   3A Corporation, Tokyo, Japan
2. 日本語かな入門 (*Nihon-go Kana Nyumon)*
   国際交流基金、東京
3. Japani Bhashar Bhumika
   Bangla Academy

Syllabus for Senior Certificate Course

Paper-I: Writing scripts (Kanji)
100 marks

1. Reading, writing and combination of Kanji (200 characters)

Paper-II: Grammar and speaking
100 marks

1. Basic Sentence Patterns (2)
2. Grammar
3. Dialogues

Paper-III: Sessional tests & Oral tests
100 marks

1. Sessional tests
2. Oral tests

Prescribed Textbooks:

1. 新日本語の基礎 II *(Shinnihongo no kiso-II)*
   3A Corporation, Tokyo, Japan
2. 基本漢字 500、vol.1 (Basic Kanji Book, vol.1)
   Bonjinsha Co. Ltd., Tokyo, Japan

Syllabus for Diploma Course

Paper-I: Advanced Grammar and speaking
100 marks

1. Sentence Patterns
2. Morphology and Syntax
3. Dialogues

Paper-II: Reading Comprehension
100 marks

1. Reading and Understanding of Paragraph and Short Essay

Paper-III: *Kanji* and Composition
50+50=100

1. Reading, writing and combination of *Kanji* (300 characters)
2. Writing of Composition and Short Essays (within 200-300 characters)

Paper-IV: Sessional tests & Oral tests
100 marks
1. Sessional tests
2. Oral tests

Prescribed Textbooks:
1. 新日本語の中級 *(Shinnihongo no Chuukyuu)*
   3A Corporation, Tokyo, Japan
2. 読解 20 のテーマ
   Bonjinsha Co. Ltd., Tokyo, Japan
3. 絵入り日本語作文入門 (Japanese Writing Practice through Pictures and Topics), Senmon Kyouiku Shuppan, Tokyo, Japan
4. 基本漢字 500、vol.II (Basic Kanji Book,vol.II)
   Bonjinsha Co. Ltd., Tokyo, Japan

Syllabus for Higher Diploma Course

Paper-I: Understanding Japanese Language through Japanese Affairs
100 marks

Paper-II: Reading Comprehension
100 marks
1. Reading and Understanding of Paragraph and Essay

Paper-III: Kanji and Composition
50+50=100
1. Reading, writing and combination of Kanji (300 characters)
2. Writing of Composition and Short Essays (within 200-300 characters)

Paper-IV: Sessional tests & Oral tests
100 marks
1. Sessional tests
2. Oral tests

Prescribed Textbooks:

1. 文化中級日本語 I
   Bonjinsha Co. Ltd., Tokyo, Japan
2. 日本語中級読解入門 (Introduction to Japanese Reading Skills)
   Aruku Co. Ltd. Tokyo, Japan
3. 日本語作文 I (Japanese Topical from Speaking to Writing)
   Senmon Kyouiku Shuppan, Tokyo, Japan
4. 新日本語の基礎 II *(Shinnihongo no kiso-II)*
   3A Corporation, Tokyo, Japan
5. 日本語中級 I
   国際交流基金
6. Intermediate Kanji Book Vol. 1 漢字 1000 Plus
   Bonjinsha Co. Ltd., Tokyo, Japan

巻末資料４．写真

－スリランカ－

①サバラガムワ大学での協議風景

②ゴール技術訓練短期大学の日本語の授業風景

③ゴール短期大学の教室

④スリランカ日本語教育協会の
授業風景

⑤セント・ジョセフ女子校の
日本語授業風景

⑥スリランカの田舎の下校風景

ーバングラデシューー

⑦ダッカ大学・ＩＭＬの学生と

⑧JUAAB での協議風景

⑨理数科教師の隊員たち